

スタジオ録音

クラウン吟友会運営委員代表 海老澤宏升

2006年

日本クラウン株式会社の録音に携わると色々な場面に出会う。昔は尺八だけの生伴奏、尺八と琴の生伴奏が主流だったが、我々の古き大先輩は平気で白虎隊などを独りで吟じ切り、最後まで声が乱れない先生が多く、古いレコードを久しぶりに聞いたりすると感心してしまう。

生伴奏の難しさは、録音を一度失敗すると、伴奏者に申し訳ないと言う感情が生まれ、次は上手くやろうと力み、最後は声が出なくなり、結局録音をあきらめざるを得なくなる。本人は悔やんでも悔やみ切れなく、会社はスタジオを改めて予約に走ることになり、双方が慌てふためく結果になってしまう。

スタジオ録音の難しさは、自分の声がスタジオに吸収されて戻ってこないの、どの位の声を出したら良いのか判らないから、普段よりも大きな声を張り上げ、最後は声が出なくなってしまうのである。最近の伴奏はオーケストラ伴奏音楽なのであらかじめ本人の手元に音楽が届き、それで練習が出来るのであるから、昔から比べると非常に楽な録音だと思うのだが、いざ、スタジオに入ると、殆どの方が風邪をひいたと言ひ、本当に声が出なくなってしまうのである。

現在の様にマルチ録音の機械が普及していない時、コンクールに入賞した若い新人女性会員が東京本社スタジオで録音に臨んだ。転句にくると声が割れ、絶句全部を吟じる事が出来ない。ディレク

ターと相談して最後にして貰った。かれこれ一時間はかかっただろうか。まだ終了しないので、スタジオにあった当時最新のマルチ録音機を使用させてくれとお願いしたのだが、マルチテープも高かったのか上司に相談してくると、本社に向かった。これが吟詠でマルチ録音機を使った初めての録音であった。悪戦苦闘の末、漸く録音が終了した途端、若い新人女性会員は涙が溢れ、今まででこんなに辛い思いをしたことがないと、涙ながらにスタジオを後にした事が思い出された。立ち会ったディレクター以下、我々も疲れ果てた録音であった。

誰もが何回録音しても気に入らないのです。どこであきらめるかが一番肝心なのです。ベテランの先生はあっさりした録音で良く収録されているのは、普段の安定した吟詠がそのまま録音されるからだと思います。スタジオは練習の場所では有りません。全国発売ですと色々な方が皆さんの吟詠を聴くことになりますので、音程、アクセントに注意して下さい。使用料の高いスタジオでは限られた時間で録音を済ませなければなりませんので、必ず練習を積んで録音に臨んで下さい。カラオケ音楽を制作するには時間が必要です。音楽がこないと練習できないとよく言われますが、送られたテープで音楽を制作いたしますので、タイミングは同じだと思います。十分に練習を重ねた吟者ほど録音時間が短いと思います。皆さん宜しくお願い致します。